

地域をテーマとした歌づくりが地域に与える影響に関する研究 － 西予市野村町大和田地区を対象として －

片岡由香^{*†}・江夏菜々穂^{**}

愛媛県西予市野村町大和田地区を事例として、小学校閉校を迎えた集落において「歌づくりワークショップ」を実施し、地域住民自身が地域をテーマとした歌を作成することによる、地域住民への影響を明らかにする。「歌づくりワークショップ」を実施することにより、地域愛着、時間的展望、地域の存続意識の向上、従来からの伝統行事への参加意欲、新規イベントへの参加意欲の向上がみられるかを調査し、地域活性化活動の一つとして歌づくりワークショップが有効的かどうか考察を行った。その結果、歌づくりのプロセスへの関与や完成した地域の歌への関与度が高いほど、地域愛着と地域の存続意識について高くなることが明らかとなった。

Keywords：小学校閉校，歌づくりワークショップ，地域愛着，存続意識，時間的展望

1. はじめに

(1) 研究の背景

人口減少や少子高齢化は各所に様々な影響を及ぼしているが、地方都市の過疎集落、限界集落、超高齢化地域などともよばれるこれらの地域では、若年人口の流出と高齢化とで集落を維持するためのさまざまな機能が低下し、生活基盤の脆弱化が進んでいる。今後は一層、全国各地で地方創生に向けたさまざまな戦略、対策に取り組む必要があり、地域再生の試みを加速させる必要がある。竹田ら（2001）¹⁾は住民がその地域に住むことの意義や誇りを自覚し、また地域の潜在的資源を発見・活用できる積極的な意識や能力の醸成を行なうこと、すなわちコミュニティ活性化を併せて図ることへの関心が高まってきたと述べている。そのコミュニティの維持に重要な役割を担っているものに、小学校などの「学校」が挙げられる。小学校には、様々な学校行事があり、保護者である地域住民が交流する機会が生まれる。小林ら（2011）²⁾は、少子化による学校区広域化が進む農山村地域において、地域と学校の繋がりの重要性述べており、地域と学校の結びつきが強く学校関係者が地域運営にも主体的に参加するシステムが地域で構築された事例を取り上げている。学校区など学校が基盤となった地域運営の重要性が示されるものの、厚生労働省³⁾によると、少子化の影響により、毎年平均約 470 校程度廃校が発生しており、過疎地域においては小学校閉校を余儀なくされる状況となっている。地域の拠点ともなる小学校は、多くの地域住民にとって「ふるさと」とされる象徴的なものだと考えられるが、小学校が閉校した地域においては、地域の繋がりが一層希薄化していく可能性を有しており、学校が無くても地域の繋がりが維持できるような環境づくりが課題となっている。

本研究では、小学校閉校後の地域において、地域らしさや地域資源、地域の思い出を込めた歌を制作することで、歌の制作に関わった住民や歌を聞いた住民らに、地域への関心や地域との繋がりなど心理的影響を与えるとの仮説を措定し、その効果を検証する。

(2) 研究の位置づけ

本研究のように歌と地域との関係を対象とした既往研究については、校歌の研究が挙げられる。近代の小学校校歌の歌詞の変遷や地域との関係を明らかにした須田（2020）⁴⁾の研究がある。また、大和田ら（1985）⁵⁾は、愛知県内の小中学校を対象に、所在地域の地形と人文・精神・自然を示す語句の出現を分析し、校歌に地域的特徴がみられること、特に山や平野等の自然に関する語句の出現パターンが所在地域によって異なることを示した。本研究で対象として取り上げる、大和田地区の「大和田のうた」は、校歌とは違い、山や平

^{*}愛媛大学 社会共創学部環境デザイン学科

(Ehime University, Faculty of collaborative Regional Innovation, Department of Environmental Design)

^{**}株式会社アットハウジング (At Housing Corporation)

[†]責任著者：片岡由香 (e-mail: kataoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp)

野等の自然に関する語句は比較的少なく、地域住民の思い出の場所、思い出の出来事が歌詞の中に多く出現している。校歌も地域的特徴が歌詞の中に出ており、地域性が感じられるが、自分と密に関係のある“思い出”を取り上げた歌詞ではないため、どこか他人事のような気持ちを校歌に感じてしまう人も少なくない。これらの点において、地域住民自身が地域をテーマとした歌を作成することは、より思い入れのある歌として認識される可能性を有している。地域をテーマとした歌づくりワークショップに関する研究については、木下（2023）⁶¹が歌づくりワークショップを行うことにより、参加者が地域で経験した思い出を想起させ記憶の共有を行うことにより、地域愛着が向上する傾向が認められた。木下の研究では、大学生を対象としており、対象地域に住み続けている地域住民ではない、新規居住者が多く含まれている。本研究では、大和田地区という一つの地域を取り上げ、その地域に居住する地域住民を対象としている点において、新規性が認められる。また、地域住民自身が地域をテーマとした歌を作成することによる、地域住民への影響を明らかにした研究は見られないため、本研究は独自性を有する。

(3) 研究の目的

愛媛県西予市野村町大和田地区を事例として、小学校閉校を迎えた集落において、「歌づくりワークショップ」を実施し、地域住民自身が地域をテーマとした歌を作成することにより、地域への愛着向上や、従来からの伝統行事への参加意欲の向上、地域での新たな活動への期待や意欲が生まれるのかについて分析し、地域に与える影響から地域をテーマとした歌づくりの効果を明らかにし、地域の繋がりを維持していくための環境づくりについて知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象地概要

研究対象地として取り上げた愛媛県西予市野村町に位置する大和田地区は、総人口 946 名、438 世帯（2023 年時点）の貝吹、釜川、蔵良、阿下の 4 集落からなる地域で、昭和 35 年に旧大和田小学校が創立された際に大和田地区と呼ばれるようになった。この 4 つの集落の地域性は様々で、伝統文化も各集落独自のものが存在する。自分は「大和田地区の住民」という意識よりも、「貝吹の住民」「釜川の住民」「蔵良の住民」「阿下の住民」という集落を意識する人が多い地域である。地形の特徴として、地域の公民館に当たる大和田地域づくり活動センターが谷に位置し、4 つの集落が山に位置しており、公民館へ集まる際は山から降りてくる形になる。このことは、後述の住民参加によって作成された大和田のうたの歌詞にも表現されている。

平成 21 年の西予市教育委員会による西予市小学校再編計画（2009）⁹¹において、児童数の減少と複式学級の増加により西予市における適正規模とするため、現野村小学校に統合する計画が発表され、平成 27 年西予市立大和田小学校は 50 年の歴史に幕を閉じ閉校した。大和田小学校が閉校する以前は、小学校の運動会と合わせた大和田地区運動会、納涼祭など地域住民の集まりの場が存在した。後述のうたづくりワークショップに参加した住民からは、「小学校閉校により、行事等で顔を合わせていた人たちとも会えなくなり、地域で集まる場というものがなくなってしまった。」という声が聞かれた。また、平成 30 年 7 月豪雨災害で大和田小学校を含めた公民館周辺も被災し、様々なイベントが中止になったうえ、新型コロナウイルスの影響も重なり、大和田地区内でのコミュニティ形成の場が少なくなっていた。

(2) 研究概要

本研究では、大和田地区において実施された住民参加型のうたづくりワークショップを対象に、ワークショップに参加した住民とワークショップには参加していないが完成された歌を聞いた住民、歌を全く聞いていない住民を対象にアンケート調査を実施し、地域をテーマとしたうたづくりの効果を検証する。

表-1 歌づくりワークショップで参加者から出されたキーワード

地域の自然・地域に関すること	鳥のさえずり、四季折々の山、肱川、川の流れ（せせらぎ）、のどかな風景、星がきれい、緑、やまびこ、鳥の声、山から降りる、飲み会
行事	里神楽、花取り踊り、納涼祭、魚つかみ
場所	大和田小学校、希望の滝
その他	美味しい空気一杯吸い込もう、大和田サイコー、ごくろうさん、大和田っ子、生まれ育った町、希望にみちた、声かけあって繋いでいこう大和田、明るく元気にみんな仲良く

i) 「大和田のうた」について

大和田のうたとは、令和4年度に大和田地区むらおこし会で制作された歌であり、令和5年5月に完成した。大和田のうたの特徴は、地域住民の思い出や名所を中心に作られた点である。一般的な校歌などは、地形的な特徴、山や川の名前など地域語と呼ばれる言葉を中心に作られているケースが多い。それらの歌詞も地域性を感じることはできるが、大和田のうたはより地域住民に馴染み、親しみ、愛される歌にするため、地域住民から直接歌詞に取り入れるキーワードを提案してもらった。歌の完成後は、野村小学校の給食時間や、復活した大和田地区の納涼祭にて大和田のうたを流し、地域住民に聞き馴染みを感じてもらえるよう、様々な場面で大和田のうたを流している。

ii) 「大和田のうた」うたづくりワークショップ

大和田のうた作成にあたり、住民参加型の歌づくりワークショップを計3回開催している。

2022年11月23日開催の第1回目では、33名の参加がみられた。参加した地域住民から、「地域での思い出」や「地域らしさ」について発言してもらい、歌詞に使用するキーワードの抽出を行った。それらのキーワードを表1に示す。完成した歌詞の中にも、このワークショップにて提案された歌詞がいくつか起用されている。大和田のうたが、住民自身が普段生活しているからこそ感じられる部分も上手く表現できているのは、ワークショップを通じて地域住民の生の声を聞き、それらを取り入れることができたからだと考える。2023年3月21日開催の第2回目では、最多の46名の参加がみられた。第2回では、第1回で得られたキーワードから歌詞案を作成して参加者に共有し、意見を出してもらった。ワークショップ後半では、大和田のうたの最後に地域住民が合唱するパートについて、歌声を入れる部分の収録を行った。この日は、アーティストであり、歌を通じたワークショップを全国で行っている杉田篤史氏の協力を得ながら収録が行われた。2023年5月14日開催の第3回目（最終回）では、35名の参加が見られた。最終回では、大和田のうたの完成お披露目会と、参加者による合唱、大和田地区で今後どのような活動を行ってみたいかについて意見を募るワークショップを実施した。

(3) アンケート調査の概要

本研究では、計2回のアンケート調査を実施した。概要については表2、表3に示す。2023年10月16日に大和田地域、大和田のうたに関するアンケート調査を大和田地区アンケート配布可能世帯382世帯に各世帯2部ずつ計764部配布を行った。回収数は246部である。2023年12月9日に開催した新規イベント「屋外おこたでぬくぬくせんかな？」のイベント終了後、参加者に行事に対する意識に関するアンケートの実施を行った。参加者は約80名で内25名からアンケートの回答を得た。本研究におけるアンケート調査について、大和田地域、大和田のうたに関するアンケート調査では地域をテーマとした住民主体の歌づくりワーク

表-2 大和田地域、大和田のうたに関するアンケート調査概要

調査月日	2023 年 10 月 16 日
配布数	382 世帯各世帯 2 部ずつ計 764 部
回収数	246 部
質問事項	個人属性：3 問 大和田のうたに関する質問：4 問 行事に関する質問：2 問 地域愛着：13 問 存続意識：4 問 時間的展望：18 問

※地域愛着、存続意識、時間的展望については「とてもそう思う」～「全くそう思わない」までの 5 件法にて回答を求めた

表-3 行事に対する意識に関するアンケート調査概要

調査月日	2023 年 12 月 9 日
配布数	約 80 名
回収数	25 部
質問事項	そう個人属性：2 問 大和田のうたに関する質問：1 問 大和田地域、イベントに関する質問：7 問

※大和田のうた、大和田地域、イベントに関する項目は「とても思う」～「全くそう思わない」までの 5 件法にて回答を求めた

ショップを通じて、参加者と不参加者間において違いがあるとの仮説を検証し、地域をテーマとした歌づくりの効果について明らかにすることを目的としている。加えて、完成した大和田のうたを聴いたことがあるかという点にも着目して検証を行う。これらの検証は地域住民を、①歌づくりワークショップ参加者②大和田のうたを今までに聴いたことがある人③大和田のうたは知っているが聴いたことはない人、大和田のうたを知らない人、の 3 つに分類をして検証を行う。地域愛着や時間的展望において、①のグループは 3 つの中で最も高く、②のグループは③のグループよりも高いという仮説の検証を行い、大和田地区の行事に対する意識の違いについても、前述と同じ仮説を用い、検証を行う。

本研究では、表 2 および表 3 で示すアンケート調査項目を設定したが、地域愛着については、鈴木ら (2008)⁷⁾ の既往研究を基にして、大和田地区に対する愛着意識に関する項目を作成した。また、時間的展望に関する質問項目については、白井 (1994)⁸⁾ が作成した時間的展望体験尺度を用いて項目を設定した。

なお、本研究で取り扱うアンケート調査については、インフォームドコンセントを得るための同意を確認するため、文書にてアンケート調査の目的を説明し、任意での回答を求めた。また調査票は無記名式とし、氏名や住所などの個人情報収集せず、個人が特定されることは不可能であることを確認した上で調査を実施した。得られた回答データの取り扱いについては個人情報保護に関する法令等への遵守の対応を行ったほか、調査対象者にもアンケート実施時にその旨を明示した。

3. 調査結果と考察

「歌づくりワークショップ」を通じて被験者内の参加の有無によって地域愛着がどの程度変化するのか、完成した大和田のうたを聴いたことがある人とない人、大和田のうたの存在を知っている人と知らない人とで地域愛着に変化はあるのかを、各意識の平均値の差異についてt検定を行った。本論文の各分析は IBM SPSS Statistics により行った。

表-4 分類別の平均値の比較（地域愛着）

選好	WS 参加者	視聴有	認知有
住みやすいと思う	4.04	36.3	3.61
お気に入りの場所がある	3.50	3.21	3.11
歩くのは気持ちよい	3.88	3.46	3.39
リラックスできる	4.25	3.69	3.60
雰囲気や土地柄が気に入っている	4.04	3.61	3.53
感情			
大和田地域が好きだ	4.28	3.80	3.75
大和田地域は大切だと思う	4.52	3.94	3.96
自分の居場所がある気がする	4.32	3.70	3.64
ずっと住み続けたい	4.44	3.81	3.82
愛着を感じる	4.44	3.88	3.84
自分のまちだという感じがする	4.29	3.66	3.66
持続願望			
いつまでも変わって欲しくないものがある	3.61	3.45	3.42
なくなってしまうと悲しいものがある	4.04	3.66	3.68

(1) 地域愛着・存続意識・時間的展望について

地域愛着に関しては、表4に示す通り、ワークショップに参加した人の方が参加していない人よりも平均値が高い傾向がみられ、「地域への愛着（選好）」「地域への愛着（感情）」については有意傾向が認められた。この結果は、歌づくりワークショップに参加し、歌詞を考える中で地域での思い出を共有したり、自分たちの住む地域を見つめ直すことで、自分たちの住む地域を肯定的に評価し（選好）、さらに肯定的に感じるのみならず、地域に対して「慣れ親しんだものに深くひかれ、離れがたく感じる（感情）」が向上する傾向にあることを示していると考えられる。同様に、大和田のうたを聴いたことがある人はない人よりも平均値が高い傾向にあり、「地域への愛着（選好）」「地域への愛着（感情）」「地域への愛着（持続願望）」において有意傾向が認められた。この結果は、歌づくりワークショップに参加することができなくても、大和田のうたを聴くことで、地域への愛着が向上する傾向にあることを示している。また、大和田のうたには地域の伝統行事、文化活動、方言などが多く入っており、それらを歌として聴くことで、「いつまでも変わって欲しくない」「なくなってしまうと悲しいものがある」といった「地域への愛着（持続願望）」においても有意な向上が見られたと考えられる。さらに、大和田のうたを知っている人は知らない人よりも平均値が高い傾向にあり、「地域への愛着（選好）」「地域への愛着（感情）」については有意傾向が認められ、「地域への愛着（持続願望）」については有意傾向が認められない項目がある。この結果から、大和田のうたを知っている人は地域のことに一定の関心があり、その関心が地域愛着（選好）（感情）へと繋がっているのではないかと考えられる。

存続意識に関しては、ワークショップに参加した人の方が参加していない人よりも平均値が高く、また大和田のうたを聴いたことがある人はない人よりも平均値が高い傾向がみられ、「地域の伝統行事を後世に残し

たい」「次の世代に地域を引き継ぎたい」については有意傾向が認められた。「観光地として栄え、地域外から多くの人が訪れることに対して賛成だ」「魅力的に感じた地域外の人が大和田地域に住むことは賛成だ」については有意傾向が認められなかった。この結果から、今ある地域の伝統行事や、地域の在り方を存続していきたいという意識はワークショップに参加者において向上するが、地域外から人が流入をしてくることに対しては個人間の考え違いによって変化してくると考えられる。大和田のうたを知っている人は知らない人よりも平均値が高い傾向がみられ、「観光地として栄え、地域外から多くの人が訪れることに対して賛成だ」のみ有意傾向は認められなかった。この結果から、地域外から人が流入してくることは寛容だか、観光地のように多くの人が地域を訪れ、賑やかになることには抵抗があると考えられる。“観光地”というキーワードに抵抗感を感じた可能性が考えられる。

時間的展望に関しては、ワークショップに参加した人の方が参加していない人よりも平均値が高い、大和田のうたを聴いたことがある人はない人よりも平均値が高い、大和田のうたを知っている人は知らない人よりも平均値が高いという傾向は見られた。しかし、有意な差を認められる項目が少なく、①歌づくりワークショップ参加者②大和田のうたを今までに聴いたことがある人③大和田のうたは知っているが聴いたことはない人、大和田のうたを知らない人、において有意な差はみられなかった。

(2) 伝統行事について

大和田地区の伝統行事への意識についての分析では、すべての行事において①歌づくりワークショップ参加者②大和田のうたを今までに聴いたことがある人③大和田のうたは知っているが聴いたことはない人、大和田のうたを知らない人、の順で「はい」と答えた人の割合が多い傾向がみられた。この結果から、歌づくり、また大和田のうたへの関与度が高いほど地域の伝統行事への参加意欲が向上することが考えられる。全体で見た各行事への参加意欲について、納涼祭の参加意欲が最も高いという結果は、納涼祭は4集落全体での行事であることが理由の一つにあると考えられる。魚つかみ大会については、子供向けのイベントであることから、回答者が20代以上の成人を対象としているため、全体的に参加意欲が低いと考えられる。また、阿下の伝統行事であるジャンボ巻きずし作りは「はい」と回答した人の内、36.7%が阿下の住人であり、貝吹の伝統行事である里神楽は「はい」と回答した人の内、51.3%が貝吹の住人であった。他集落の伝統行事よりも自分の住む集落の伝統行事への参加意欲が高い傾向にあることが明らかになった。

(3) 今後に期待する行事について

うたづくりワークショップの最終回で参加者に聞いた意見をもとに、新規イベント「屋外おこたでぬくぬくせんかな？」というクリスマスイベントが企画された。本イベントでは、大和田のうたの生演奏や、これまで一部の集落内でしか見ることのできなかった里神楽のステージ披露が行われ、地域住民に集落の垣根を超えた交流をしてもらうことを目的としていた。そのような中で、大和田のうたに関しては、多くの人が自分たちの地域を表現する歌だと感じたという結果が得られ、大和田のうたの認知、また地域住民の大和田のうたへの愛着の醸成に繋がったと考える。また、他集落の伝統文化活動を実際に見ることで大和田の新たな魅力の発見に繋がり、それらの伝統文化活動を後世へ残していきたいという思いも生まれた。4集落合同のイベントの場で、それぞれの伝統文化活動を披露することの効果を見ることができたと考える。また、大和田地区を活性化させたい、盛り上げるために自分が率先して何かをしたい、という気持ちも芽生えており、新規イベントの実施を通して住民が傍観者から、地域づくりの当事者に成長する様子がうかがえる。今後も4集落合同のイベントをやりたいか、という項目が一番「とてもそう思う」の割合が高く、今回の4集落合同の新規イベントが集落の垣根を超えた交流を生み、地域住民に前向きな意識を与えるきっかけになったと考える。地域住民の“大和田”という意識が希薄化していた現状に変化を与えるきっかけとなった。このような前向きな結果が得られた理由の一つに、本アンケートの回答者がイベントの運営に携わっていた人、歌づ

くりワークショップに参加をしていた人と被っており、元々地域の活動に意欲的な人が回答者に多く含まれていた可能性が考えられる。

5. おわりに

本研究では、地域愛着と存続意識は、歌づくり、大和田のうたへの関与度が高いほど向上することが明らかとなった。地域愛着においては、「選好」「感情」、存続意識においては「地域の伝統行事を後世に残したい」「次の世代に地域を引き継ぎたい」などの今ある地域の伝統行事や、地域の在り方を存続していきたいという意識が向上した。歌づくりワークショップに参加した人が最も高い意識を持っており、次にワークショップに参加できなくても大和田のうたを聴いたことがある人は聴いたことがない人よりも高い意識を持っており、さらに大和田のうたを聴いたことがなくても歌の存在は知っている人は知らない人よりも高い意識を持っていることが明らかとなった。時間的展望に関しては、歌づくりワークショップを行うことによる直接的な関係性はみられなかった。いくつかの項目においては、向上傾向が認められるものもあったため、第3回歌づくりワークショップで話し合われた「今後やってみたい活動」を実践していくことで、時間的展望においても影響を及ぼす可能性が示唆された。高齢化が進んだ大和田地区のような集落では、高齢者でも楽しめる軽スポーツ、お茶会などを行うことで時間的展望の向上に効果的だと言える。地域の伝統行事やイベントへの意識に関しては、歌づくり、大和田のうたへの関与度が高いほど参加意欲が向上することが明らかとなった。さらに、新規イベントを開催し、歌づくりワークショップにより完成した「大和田のうた」を披露する場を設けることで、より大和田のうたが認知され、地域住民の大和田のうたへの愛着の醸成に繋がること示された。本研究では、地域をテーマとした歌づくりワークショップの地域に与える影響を検討してきたが、歌づくりワークショップに参加できなかった人にも「歌を聴く」という行為を通じて繋がりを生むことのできる可能性を有している。様々な集落再生を目指す活動や地域の魅力を発見する活動がある中で、歌づくりならではの効果を示すことができたと考える。

本研究で取り上げた事例である大和田のうたの歌づくりワークショップは計3回実施しているが、ワークショップの回数を増やすことで、3回という限られた日数よりも参加できる人数が増加すると考える。また、大和田のうたの歌づくりワークショップでは、参加者が普段から地域のことに関心があり、地域づくりに前向きな意見を持った人が多かった傾向にあると考えている。そのため、参加者を募る際に、普段はあまり地域のことに積極的ではない地域住民にも参加を募ることで、より幅広い層に歌づくりワークショップを通した各尺度の向上をアプローチできると考える。さらに、大和田地域では小学校閉校により、旧大和田小学校の校歌が歌われなくなり、地域の繋がりも希薄化していたという背景があり、歌づくりに思い入れが強くあった。他の地域で歌づくりワークショップを行う際にも、歌を作るに至った背景をワークショップ参加者に共有することで、より地域をテーマとした歌づくりの意義を見出すことに繋がるのではないかと考える。

謝辞

大和田地域づくり活動センターの三瀬史弥氏をはじめ調査にご協力いただいた西予市大和田地区の皆様には深く感謝申し上げます。また地域をテーマとしたうたづくりのプロセスにおいてご助言ご協力をいただいたアーティストの杉田篤史氏に感謝の意を表します。

【参考文献】

- 1) 竹田浩二,吉武哲信,出口近士,「定住作家と住民との交流によるコミュニティ活性化のための交流マネジメント

の有効性,」日本都市計画学会学術研究・論文集 vol.36 ,pp. 481-486.

- 2) 小林史嗣,斎尾直子(2011) 農山村地域における学校区広域化の実態と学校を基盤とする地域運営の課題, 農村計画学会誌 30 巻論文特集号 pp. 267-272.
- 3) 厚生労働省,廃校の発生状況・廃校の活用状況,(2024 年 1 月 18 日閲覧)
- 4) 須田珠生 (2020): 近代日本の小学校にみる校歌の歌詞の変容と郷土との関わり. 音楽教育学, 49 (2), pp.13-24.
- 5) 大和田道雄,加藤元子,菅政子,大高恵子,藤井裕士(1985), 環境教育への気候学的アプローチ—小・中学校校歌詞と地域性—, 愛知教育大学教科教育センター研究報告,9, pp187-197.
- 6) 木下朋香(2023),地域をテーマとした「うたづくりワークショップ」による記憶の共有と地域愛着に関する研究, 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科卒業論文
- 7) 鈴木春菜,藤井聡(2008), 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集 Vol.25-2 pp.357-362.
- 8) 白井利明(1994),時間的展望体験尺度の作成に関する研究, 心理学研究 65 巻 1 号 pp. 54-60.
- 9) 西予市教育委員会(2009)「西予市小学校再編計画」

Research on the impact of community-themed songwriting on the community - A case study of the Owada area, Nomura-cho, Seiyo City, Ehime Prefecture -

YUKA KATAOKA, NANAHO ENATSU

A workshop for songwriting and lyric writing was held by residents in a village where an elementary school had been closed in the Owada district of Nomura-cho, Seiyo City, Ehime Prefecture. The study then clarified the impact on local residents by having them themselves create songs about their community. In this study, we investigated whether there was an increase in community attachment, time perspective, awareness of community survival, willingness to participate in traditional events, and willingness to participate in new events, and considered whether song-making workshops are effective as one of community revitalization activities. The results revealed that the higher the level of involvement in the songwriting process and in the completed community song, the higher the attachment to the community and the intention regarding community continuity.